

## 挑 戦

～みんなの想いが未来を創る～

地球が誕生してから46億年  
人類が誕生してから20万年  
私たちの生きている事のできる期間はわずか80余年  
そのうちアクティブに活動できるのはどれくらいだろうか  
明治維新、日清戦争、日露戦争、大東亜戦争を経て、  
生き残ってきた私たちのおじいちゃん、おばあちゃん、先人たち。  
それぞれの時代において、それこそ文字通り命をかけてその年代を駆け抜けた。  
子どもたちにこの国を残そう、明るい豊かな社会を作ろうと必死だったに違いない。  
そしてそんな先人たちの繋いできた、奇跡とも言える私たちの存在。  
21世紀になり、もう20年が経とうとしている今、  
私たちがやるべきことがあるはずだ。

この20歳から40歳という限られた時間の中で、  
私たちがやるべきことがあるはずだ。

～はじめに～

私たちは、この地域のためにと語る前に、自分の日々の行いは真っ当なものだろうか。  
一番身近な家族に対しての責任を果たしているだろうか、親には孝行しているだろうか。  
常に謙虚に自分自身を見つめたい。そして個から一歩社会に出た時、自分たちだけで良い  
という考えではなく、地域との繋がりの中でその役割を果たしているだろうか。家族・社  
員・経営者としての責任は果たしているだろうか。今の自分に出来ること、この時代に生  
まれた自分だからやるべきことをやっているだろうか・・・。

今振り返ると、社会に出る前、地域に対して、そして自分たちの未来に対してどう考え  
ていたのだろう。私は、私よりも先に就職していた同級生が、誰もが知る大手企業に入る  
も、数年ぶりに会った時の疲れた姿を見て、自分の将来への不安を感じたことを思い出す。  
本当にこのまま就職していいのだろうか。進化し続ける技術に自分が追いつけなくなった

時、自分は生きていけるのだろうか。あの頃を思い出すと、将来への期待感よりも様々な不安要素からリスクを割り出し消去法のような選択をしていた。

当時は就職氷河期であり、あの日産自動車はカルロス・ゴーンの日産リバイバルプランの元、2万1千人の従業員のリストラを行って間もない時だった。学校を卒業し、就職もせず起業した私は、卒業したその年に三島青年会議所に入会していた。その頃は、東海道400年祭もあり、三嶋大社から広小路までの区間を歩行者天国にし、廃棄されたビデオテープを使ったドミノ事業を行っており、それを手伝ったのがきっかけだった。社会や大人に対して反抗心も持っていた私は、そこに普通の大人と違う、目の輝きがはっきりと分かる青年世代の大人がいることにとってもワクワクした。地域のために何か変えてやろうという大人が積極的に地域に貢献する運動をしていた。彼らは自分たちの将来を悲観するのではなく、どうやったら次世代に明るい豊かな社会を残せるか考えながら愚直に行動していた。そんな彼らに憧れたのかもしれない。

青年会議所に育ててもらったと言っても過言ではない、そんな私が理事長という立場で、先輩諸兄に恩返しをさせていただく機会をいただけたことは、この上ない喜びと同時に責任の重さを感じる。そして、「自分は今、あの頃の先輩たちと同じように輝いて見えるのだろうか。」と問いかけながら、自らも最高の輝きを放てるよう全力で運動をしていきたい。

よくJCしかない時代からJCもある時代と言われる。多種多様な民間団体が現れたことで青年会議所としての存在意義が薄まっているという意味だろう。私はその意見にNOを突き付ける。たとえ他にいくつものまちづくり団体が現れたとしても、私たち青年会議所だからできることがある。私たち青年会議所だからやるべきことがある。先輩諸兄が残してくれたこの青年会議所だからこそできる。私たちの運動の責任はとても重く、やりがいに満ち溢れている。今の時代が求める「明るい豊かな社会」を真剣に考え、その実現に向け運動を展開していくことをここに誓う。

～人を創る～

大東亜戦争で敗戦国となった日本は、昭和22年3月31日に施行された教育基本法により6・3・3・4制が取り入れられた。義務教育の後には高校、そして大学へ進むことがほぼ唯一の選択肢となり、近現代はほとんど試験に出ないから勉強しないと言う声も聞くようになった。

そもそも学校教育とは何のためにやるのだろうか。何でも柔軟に吸収できる貴重な時期に、今のこの国の礎とも言えるべき近現代を学校教育で学ぶことができないことは、同時に地域の成り立ちについての学びにも影響し、「なぜ私たちはこの地域で生きていることができるのか」ということすら考えない人が多く存在する原因でもあるのではないだろうか。

まさに今、先人より脈々と続き受け継いだこの地域、ご先祖様から受け継いだ血によって存在している自分自身の命、それらをしっかり認識し、先人たちに感謝しこの地域を愛することができる、次世代を担う子どもたちの健全な精神の育成が求められており、これら事業を実施していきたい。

#### ～地域を創る～

私たちの親の世代は、敗戦による絶望の淵から高度経済成長を実現し、電気・水道・道路に至るまで、この地域の基礎となるインフラを整備してきた。

近年は、1998年からの長きに渡るデフレ経済が現在まで続き疲弊しているが、2020年に迎える東京オリンピックでは伊豆ベロドロームでの自転車競技が決まり、私たちが生活するこの地域の得意分野でもある観光業にとっては、世界にこの地域を知ってもらう千載一遇のチャンスを手に入れたと言ってもよい。

一方で地域の担い手である若者は東京に憧れ、若者の集まる県内大学でも、その卒業生の10%程度しか静岡に残る者はいない。つまりこの地域に可能性や魅力はあっても、人々のトレンドを先取りした新しい街並みは楽しく魅力的であり、就職においては自分のやりたいことができる企業や安定した大手有名企業に目が行くため、結果大都市へ人口が集中し、地方からは若者が流出し続けるという社会的構造になってしまっていると考えられる。都心と地方の様々な格差が問題となる中、その是正策として魅力ある企業が存在することが先か、雇用のための人材が豊富にいることが先かはわからない。だが、魅力ある企業があり、安定した雇用が持続的に生み出されることが、地域の発展を可能とするのだから、企業にも若者にもこの地域を選んでもらうことが必要である。

そこで、この地域を受け継ぎ創り続けていく若者と協働しながら、この地域の魅力や楽しさを伝え、地域との繋がりを深めることで、まちづくりをするのは自分たちなのだという主体者意識を醸成する事業を展開したい。

また、この地域を次世代にしっかり引き継ぐためにも、常に環境に配慮し、昨今各地で猛威を奮っている風水害を始めとする災害に対しても迅速に対応できるよう、連絡体制を整え対応していきたい。

#### ～組織進化～

JCであれば公益法人格取得がさも当たり前という時代から長い年月が経った。公益社団法人日本青年会議所を始めとする全国では、この公益法人格の検証を進める中で、より適した法人格が必要ではないかという議論が行われている。三島青年会議所も、公益法人格を取得し運営していくなかでその組織進化を図ってきた。地域に向けた数々の公益事業は、公益社団法人という信頼もあり、多くの方に受け入れられ実施することができた。し

かし、組織として公益法人格であるがゆえにその枠組に縛られてしまい、本来の青年会議所が得意とする、機動的で柔軟な活動が難しい状況も見受けられる。

また、青年会議所は20歳から40歳までという年齢制限を設け、常に次世代を取り込んで新陳代謝を繰り返す青年団体だ。私たちは、限られた期間の中全力で地域のためにと活動することで、自身の資質を向上させながら、志を同じくする深い絆で結ばれた仲間作りができる。ところが40歳での卒業を迎えるに当たり、最近の調査では入会から卒業までの在籍期間が全国平均3.5年と言われている。すでに三島青年会議所もメンバーの大半が2014年以降に入会している状況であり、例外ではない。そのような短い活動期間が当たり前となってきた中で、時間を惜しまず全力で取り組み、地域への貢献と自己の成長を達成する者もいるが、あと一年あればもっと良かったという声を多く聞くのも事実だ。青年会議所の魅力に気づく前に卒業してしまうメンバーも少なからずいるのではないだろうか。

私たちは、会員相互の交流の中で、この青年会議所が培ってきた良き伝統やしきたりをしっかり受け継ぎ繋いで行くと同時に、より若い世代の会員拡大を行い、メンバー一人ひとりが真剣に議論できる委員会活動を重視し、全員の意見で作上げた事業を実施する中で、多くのメンバーが青年会議所の魅力を体感し、卒業後もJAYCEEであったことに誇りを持ち、各々地域に貢献していくリーダーを輩出する青年会議所を存在させ続けたい。そのためにも、日本の国柄とも言える「和」を体現すべく全力で議論し、その中で他を慮ることを大切にしながら、変化を恐れずチャレンジをしていくリーダーの育成を行っていききたい。設立当初から現在に至るまで改正をしながら進化させてきた定款や規程、この組織そのもののあるべき姿も議論し勉強しながら、変化に柔軟に対応しこの地域に必要とされ続ける青年会議所を繋いでいかなければならない。

～結びに～

1962年9月22日に全国で217番目の青年会議所として承認されて以来、多くのリーダーを輩出してきた三島青年会議所。60～70年代の高度経済成長期、90年代初頭までのバブル期、そして1997年の消費税増税をきっかけとしたデフレ経済突入から20年が経とうとしている。日本人一人ひとりの所得はほとんど上がってない。

日本各地の青年会議所も時代の流れに抗いながら、全国で会員拡大を行っているが、メンバーの減少傾向は続いている。

変わらなければならない時期だと思う。

改めて「明るい豊かな社会」とはどういった社会なのか考えてみたい。それは、それぞれの思い描いた、あったらいいな、こうだったら幸せだなという、それぞれの想いが実現する社会ではないだろうか。そんなそれぞれの想いが行動となり、地域を創る。

そうであるなら、志同じく集まった私たちが一番やりたい事業をやろう。それこそが地域が最も求めていることだから。それぞれが全力で思いを巡らし、全力で考えれば、絶対この地域は良くなる。日本は良くなる。

一切の柵や思い込みに囚われること無く、自分自身で考えて実行して行こう。

私たち一人ひとりが全力で考えて知恵を出し合えば、乗り越えられない壁なんて無い。

今私たちは私たち自身のための必要性よりも、次の世代にとって必要なことに挑戦して行こう。それが今の私たちに最も必要なことと信じて。